

研究室紹介

関西学院大学 教授 中村 明

3月まで JICA にて勤務していた中村です。4月より、関西学院大学国際教育・協力センターの教員として赴任しました。関西学院大学は、文部科学省のスーパーグローバル大学創生事業 (SGU: Super Global University) に採択され、”多文化が共生する国際性豊かなキャンパスの実現“というビジョンを掲げ、スクールモットーである Mastery for Service (奉仕のための練達) を体現する世界市民の育成を目指した教育を実践しています。そのため、世界市民としての資質を育成するための講義の他、早い段階より学生に海外の経験を積ませるための各種プログラムと制度があり、大学4年間の間に複数回の海外派遣を経験する学生が少なくありません。その中で現在私は、国際社会貢献を目指す学生の資質の育成を目的とした講義と海外に派遣するプログラムのための学生の指導を担当しています。この春学期は、講義としては世界市民論という複数の教員で講義するオムニバス形式の講座と国際情報分析というメディアリテラシーの向上などを目指す講座などを担当しています。秋からはグローバルゼミと呼ばれる国際社会での課題分析能力の向上などを狙った講座を持つことになっています。学生を海外派遣するプログラムは基本的に学生を単独で派遣するものですが、マレーシアやベトナムで現地の大学の協力のもと実施しているフィールドワークには教員が同行しており、

この8月には学生とマレーシアに行く予定です。



私は今まで、開発途上国の問題の解決、特に持続可能な社会の実現に向けたキャパシティディベロップメント

(途上国側の関係者自らのイニシアティブによる能力開発) を研究テーマにし、国際 P2M 学会においても発表の機会を頂き、学会の方々からも数多くの貴重な助言を頂きました。今こうして大学教員という立場で仕事をしてみるとこのキャパシティディベロップメントという考え方については、学生教育においても共通の理念として通用すると感じています。人から教えられるものを学ぶ”学習“から、自らが学び、考え、解決する”学問“のレベルに引き上げ、さらにそれを社会の問題解決につなげる”応用力“を身に着けるといふパスに学生を導くには、教えることではなく、自らが考える、キャパシティディベロップメントの理念を重視した教育が必要だと感じています。関学には、能動的授業、つまり提示された課題に対し、学生自らが調べ、考え、

プレゼンをし、それに基づき皆で議論をするという形のものが多いです。そのため、学内にはかなりの収容力のあるコモンズと呼ばれる共用スペースがあり、そこはいつも自習したり、グループ作業したり、議論したりといった学生であふれています。こういった形で鍛えられる学生は、常に新しい課題や自分のステップアップを考えるようになるとの印象をもっています。そういった学生が毎日のように私の部屋を訪れ、話をしていきます。



関学も海外派遣する学生などにプロジェクトマネジメントを学ばせています。このマネジメントについては、まだ講義を聞くという範囲にとどまっており、実践への適用が課題だと感じています。具体的な問題を解決するには、それをプロジェクト、さらには上位のプログラムとして形成、それを実行、管理す

るマネジメントという活動が不可欠なのは言うまでもないことですが、それを大学の教育課程の中でどのように適用していくのかが私自身の今後の課題になりそうです。

現在の大学のキャンパスは、西宮市の上ヶ原という阪急電鉄沿線の閑静な住宅地にあります。鉄道を中心に宅地開発、百貨店、宝塚劇場や動物園などを総合的に整備し、人々の暮らしやすさ、楽しみを追求した小林一三の街づくりの精神が今でも踏襲されています。実は関学、神戸女学院も一三が誘致した大学です。背後に甲山を控えた西洋風建築部と豊かな緑が調和するキャンパスの景観は美しく、雑踏からも離れ、学びと探求の場として理想の空間が実現されています。お近くに来られた際はお立ち寄りください。



(連絡先)

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス
G号館 国際教育・協力センター 教授

aknakamura@kwansei.ac.jp